

失われた絆も一度

「伝統を大事にする大槌町民にとって郷土芸能は絆のシンボル」と小石さんは言う。1月31日、大槌町

地域に伝わる郷土芸能を復活させた。

「私たちはあまりに多くのものを震災に奪われた。せめて人のつながりだけは元に戻りたいと思った」

津波で母親が行方不明になり、姉とおいは亡くなった。自分が副代表を務める町指定無形民俗文化財・城内大神楽保存会のメンバーも多くが犠牲になり、難を逃れた人は仮設への入居で散り散りに

「このままでいいのかわからない」。居ても立ってもいらなくなりました。

生き残ったメンバーの所在を一年がかりで突き止めた。津波で流されたり壊れたりした獅子頭や太鼓も作り直した。神楽の再開にこぎ着けたのは震災翌年、2012年の秋祭りだった。

「活力に満ちた郷土芸能は舞い手も観客も心がほっこり温かくなる。その時だけは何もかも忘れられる」

「温かさ」は震災の悲しみさえも、少しの間だけ拭ってくれるという。

「仮設団地は知らない人ばかり。最初はどうしていいかわからなかった」

健康体操教室に参加する鈴木ヒロさん(75)は津波で自宅を流され、その年の7月、仮設団地へ入った。以前のお隣さんとは離れ離れ。スーパーや病院でたまに出くわすぐらいだ。

団地では顔を合わせた住人に「おはよう」「こんにちは」と、あいさつするよう心掛けた。健康体操教室など集会所でのイベントにも積極的に足を運び、友人は少しずつ増えた。

「大切な人や家を失って言葉にならない思いを抱えた者同士、自然に心が通じ合った」と鈴木さん。

ただ、仮設団地はいずれ退去する。自宅があった場所は公共施設の建設が予定

仮設団地は震災後に急造さ

れ、入居の申請書には「第9希望」まで書く欄があった。望みは必ずしもかなわず、結果的に地域コミュニティは分断された。

孤立すれば孤独死や自殺を招きかねない。大槌町はいまだ人口の2割以上が仮設暮らし。親睦を深め、助け合う契機にとの願いを、教室に託しているという。

2月上旬の昼下がり、岩手

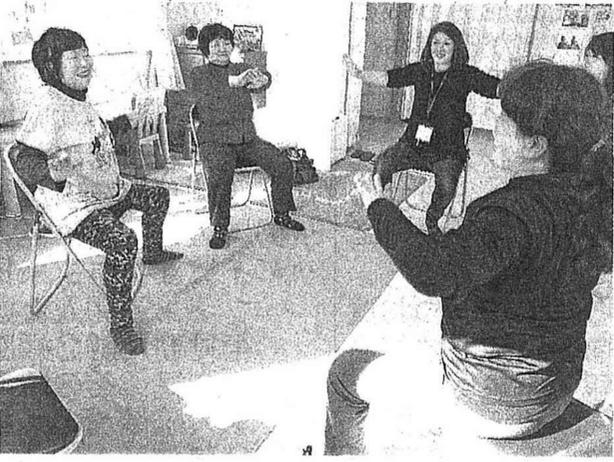
県大槌町の仮設団地集会所。いすを並べて車座になっているのはお年寄り6人だ。両腕を伸ばしたり腰をひねったり。最後は歌いながら全身を動かした。

国際医療ボランティアAMDA(岡山市)が大槌町に置く支援拠点「大槌健康サポートセンター」主催の健康体操教室。町内48の仮設団地を対象に週1回、2カ所を巡回する。

体操が終わると、お茶や菓子を楽しむ「お茶っこ」のひととき。この日は津波を見た時の驚き、食料が少なかった避難所のつらさが話題になった。

「仮設住宅は狭く、運動不足になりがち。普段、口にしづらいことを吐き出して心も楽にしよう」。体操を指導したセンターのスタッフ、菅谷安美さん(25)は言う。

健康体操教室の目的はもう一つある。



心身をリラックスさせるためのAMDAの健康体操教室。仮設団地で暮らす人同士が親睦を深められるようにとの願いも込められている。2月3日

復興道半ば

4 共同体の分断

震災5年 岩手・大槌からの報告

あまりに多くのものを奪われた。せめて……